

2022年5月1日 礼拝説教要旨

詩編講解説教107「死に打ち勝つ信仰」

詩編107：10～16、ルカ24：1～7

詩編第107編は特徴ある構造を持っています。4つの場面が描かれていて、砂漠の旅人（4～9節）、囚人（10～16節）、病人（17～22節）、嵐の海を航海する人（23～32節）。そしてそれぞれの場面で同じ言葉が繰り返されています。「苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと、主は彼らを苦しみから救ってくださった」（6、13、19、28節）「主に感謝せよ。主は慈しみ深く、人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる」（8、15、21、31節）

この四つの場面に共通していることは「死」です。砂漠の旅人は常に死と隣り合わせです。砂漠で迷い、彷徨うならばやがて水や食料が尽き、飢え渴いて死んでいくでしょう。また囚人もそうです。捕らえられ牢獄に入れられる。「彼らは闇と死の陰に座る者」（10節）とあります。劣悪な環境の中で、またいつ殺されてもおかしくない。具体的には捕囚の記憶がここに反映されていると言われます。また病いもまた死を意識させます。「どの食べ物も彼らの喉には忌むべきもので彼らは死の門に近づいた」（18節）とあります。食べ物が喉を通らず、体が衰えていく様子です。嵐の海の航海も死と隣り合わせです。ちょうどここを準備している時にあの北海道の観光船の事故がありました。本当に痛ましい事故です。でもこれらは決して他人事ではありません。わたしたちも常に死と隣り合わせの状況に置かれています。ある日突然命が奪い去られることもあるのです。

ここで重要なことは、わたしたちが遭遇するこのような困難が罪の問題と関係させられていることです。「神の仰せに反抗し、いと高き神の御計らいを侮ったからだ」（11節）「神の仰せ」というのは「神の言葉」のことです。創世記のアダムとエバの話の思い起こします。人間は神さまとの約束を破って食べてはならない木の実を食べてしまいました。神さまの言葉に逆らった結果、人間は樂園から追放され、死に定められる者となりました。「塵にすぎないお前は塵に返る」（創世記3：19）とあります。命の息を吹き入れてくださった、命の源である神さまとの関係が断絶するならば、わたしたちはただ塵に返っていただけなのです。パウロも「罪が支払う報酬は死です」（ローマ6：23）と述べていますが、死は罪の結果、わたしたちが当然払うべき重い代償になってしまいました。

その上で、この四つの場面を改めて見てみますと、これはわたしたちが負うべき罪の代償としての死であることがよく分かります。砂漠を旅するというのは、神さまのもと樂園を追放されたわたしたちが、その命の源を失ったままこの世を彷徨う状態です。これは肉体的な飢え渴きというより、魂の飢え渴きでしょう。「渴いた魂」「飢えた魂」（9節）とあります。カルヴァンは「霊性の飢饉」と言います。生活は豊かでも、霊的に飢え渴いている。にもかかわらずその自覚がありません。また魂と体は結びついていますので、魂が飢え渴けば体を病むことになる。加えて嵐の海ですが、「海」は聖書では混沌、あるいは死、陰府の象徴でもあります。それに翻弄されている状態です。わたしたちは死の恐れに絶えず揺れ動く存在であることが示されます。このことについては多くを語る必要はないでしょう。誰もが死の不安を抱え、恐れを感じています。

そしてその死に捕らわれた状態こそ、10節以下に描かれる囚人の姿ではないでしょうか。闇闇に支配され、「死の陰」に座す。またここには「鉄の枷」「青銅の扉」「鉄のかんぬき」とありますが、まさに死の中に閉じ込められ、支配されている状態です。いや、自分は生きているのではないか。死に支配されてはいない。そう考えるかもしれません。わたしも若い頃はそんなに死を強く意識することはありませんでした。しかし年齢を重ねていきますと、老いていくこと、病気になることを真剣に考えるようになります。あとどれくらい元気で働けるだろうか。そういうことを本気で考えるようになる。残りの人生のことを考えます。それは生きながらにしてすでに生きることに死ぬことに不安を持つということでしょう。何かあると生きる張り合いがなくなる。生きていく勇気を失う。生きる感謝を失う。これもまた死の支配が確実に始まっているということでしょう。そのように死の陰に座り込み、翻弄され、嘆くわたしたちなのです。

でもそのように死に支配されているわたしたちに向かって御言葉は繰り返します。「苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと、主は彼らを苦しみから救ってくださった」「主に感謝せよ。主は慈しみ深く、人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる」と。罪ゆえに樂園を追放され死に支配されているわたしたちを主は憐れみ、その慈しみ、変わらない愛のゆえに驚くべき御業を成し遂げてくださった。そのことが指し示していることこそイエス・キリストの救いに他なりません。主イエスは十字架で死なれ、三日目によみがえられました。二週間前はイースターでした。教会は復活節の喜びにあります。キリストが死を打ち破り、墓を打ち破って、闇と死の陰に座るわたしたちをそこから立ち上がらせてくださった。そしてご自身の命を持って罪を贖い、樂園を約束してくださいました。そこにイースターの喜びがあります。

今日の御言葉を読みながら、主がよみがえられた時に、墓を塞いでいた大きな石が取り除かれ、墓が空っぽだったことを思い起こします。闇と死の中に閉じ込められていたわたしたちをそこから解き放つために、主は十字架で死なれ、葬られ、三日目によみがえられました。わたしたちの先陣を切って、墓を打ち破り、死に打ち勝ってくださいました。だからもはや罪を恐れることも、死に支配されることもありません。キリストのよみがえりによって死の意味が変わってしまったのです。『ハイデルベルク信仰問答』は「わたしたちの死は、自分の罪に対する償いではなく、罪との死別であり、永遠の命の入り口なのです」(問42)と告白します。ここにわたしたちの希望があります。